

『広島 記憶のポリティクス』 : なぜ、いま、それ、なのか

畑中, 佳恵
西南学院大学非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/8501>

出版情報 : 九大日文. 7, pp.120-123, 2006-04-30. 九州大学日本語文学会「九大日文」編集委員会
バージョン :
権利関係 :

書評 『広島 記憶のポリテイクス』

——なぜ、いま、それ、なのか——

HIKAKA
YOSHIDA
畑中 佳恵

期せずして「戦後六〇年目の夏」という衆目を集める時期に日本語訳の出版された本書であるが、著者米山リサの、

この場所やその地の歴史と人々に実存的なつながりを見出さない人たちにとって、そこで起こったこと、起こりつつづけていることと自分たちの生とが分かち難く互いに連結しあっていることにどのようなようにしたら気づくことができるだろう。(五六頁)

——という問題意識は、公的な節目の言説としてある「現在」ではない「現在」を見据えようとしている。

一年に一度、あるいは十年に一度、特定の日に特定の出来事を想起し、儀礼的態度でもって消費する「現在」は、出来事との距離を測定する身ぶりを通して、その出来事を「過去」のものとして切り離す。切断を否認する者の現れによっても、この「現在」はびくともしない。彼・彼女らの存在と重ねるように「当事者」が実体化されるならば、他方には「非当事者」が実体化されるのだから。他方とはもちろん、公的な距離感と作

法を身につけた、「現在」の構成員のことである。

米山が照らし出そうとする「現在」はといえば、さしあたり、《ポストコロニアルおよびポスト核の時代状況》(五五頁)、《国民国家が制度的な単位として存在しつづけ》(二九七頁)る状況、という大きなキーワードとして確認できる。

「ポスト」という接頭辞が前時代からの切断を意味しないことは周知のとおりで、植民地主義的な言説、核の恐怖とそれと政治的カードとする言説は形こそかえ——《修正、反復、さらには強化》(三五頁)され——「現在」の主要な構成要素となっている。また、出来事をめぐる記憶が国民のレヴェルで要請され整備されるのは、それが独立した「過去」に属す何かではなく、「現在」に必要な国民化の言説であるからに他ならない。

この認識に従うなら、原著が刊行された一九九九年と日本語訳刊行の二〇〇五年、そしてさらに出遅れた本書評の「いま」も、状況を等しくするといつていいだろう。(いま私たちが当事者であること)を可視化しようとする本書の試みとはいかなるものなのか。そこには、ある対象を切り取り説明する言葉が、切り取り説明する者の位置性を巻き込んでいることや、それゆえ「現在」に機能しうることに関心を寄せる者にとって、無視できない議論が含まれているに違いない。

さて、「いま」に連結する出来事のなかでも、なぜ他でもない「それ」——広島原爆被災をめぐる記憶と語り——に注目するのか。米山の言及を拾い集めると次のような回答をえられる。ポストコロニアルに進行中の様々な《死の不均等配分》(x

頁)を喚起し、またポスト核の放射能汚染(例えば劣化ウラン弾によるもの)や核武装化への動き(現今の日本など)への警告となるから。また大枠としては国民の語りに回収されてきた一方で、その経緯には《多元的な意味》(Ⅷ頁)へのベクトルが介在していたから。諸力のせめぎあい(ポリテクス)の場として辿りなおすことによって、《隠蔽された知》(Ⅷ頁)の抵抗力・批判力を前景化しようというわけである。

本書の構成にそって具体的に紹介しよう。序章ではまず、広島平和記念公園の様式的起源が「大東亜建設記念营造計画」の一部にある、という井上章一の論が紹介され、これが一般に忘却されている事実に注意が促される。両者をめぐる言説は、《平和と人類の修辭》(三三頁)が日本人のナショナリズムと結託しているという構造において等しい。他にも、原爆死没者慰霊碑の碑文をめぐる論争(記念の遂行主体は誰なのか)や、原水爆禁止日本協議会の内部分裂として現れた《いかなる国》問題》(二九頁、何処に向けての反核キャンペーンなのか)に、《普遍主義と特殊主義の相互補完性》(三二頁)が指摘される。その背後に取り残されてきたもの(痕跡)を拾いあげ、その可能性に照射することが、以降の章を貫くテーマとなるだろう。

第一部第一章「記憶景観の馴致」では、広島市の再開発計画や企業によるイベントにおいて、《死の景観が豊かさ、魅惑、快適さの景観へと転化されていくプロセス》(七七頁)が辿られる。この「明るい広島」の形成過程で、「暗い過去」を想起させる遺跡(日本銀行旧営業所・原爆ドーム・赤十字病院)の解体・除

去が計画されるが、それに対する反対活動をとおして出現した《競合的な記憶》(九九頁)に注目するのが、第二章「廃墟の記憶・記憶の廃墟」である。

ひたすら前進することを強いる支配的な時間感覚のオルタナティブとして、出来事を想起する者たちは《沈思の時》(二〇七頁)を体験していた。彼・彼女らの「喪失」をめぐる語りは多様なが、聴く者に核兵器の開発・使用に帰結した「進歩」への疑念をいだかせ、遺跡が被るうとしている「第二の喪失」への警鐘を鳴らす。遺跡から導かれる《悔恨と省察》(二二六頁)の時のうちに聴き手をもとどまらせようとする語りは、《批判的に政治化されたもの》(二二五頁)と評価された。

第二部にあたる第三章「証言活動」、第四章「記憶の迂回路」では、公的な証言活動が考察対象となる。広島原爆被災を生き延びた人々の語りは、「被爆の実相」という公的な歴史の一点点を証言するものとして、《真実のレジーム》(三三五頁)から権能を与えられていた。が、その一方で、彼・彼女らは出来事を完全に伝達することの不可能性を感じてもいた。一九八三年に設立された「語る会」のメンバーたちは、被爆がその後の人生に与えた影響を中心化して語り、それによって《わたし》の時間》(二六一頁)を取り戻そうとする。このような証言活動は、固定化された被爆の証言と被爆者像に対する異議申し立てとして位置づけられている。

とくに第四章では、五人の語り手の活動に焦点がしぼられた。なかでも「語る会」の沼田鈴子の語りの戦術は、当時の自分に

は知らされていなかったことを結びつけ並べてみせることにあ
るといふ。(例えば広島の一連隊をあこがれの的としていた軍国少女
時代の記憶と、後に訪れたマレーシアのある村で中国人住民を虐殺したのが
同じ連隊だと知ったことを。) 出来事の《言及的真実を無限に遅延
させ》(二八一頁)つつ、公的に供給される「表の知」の性質に
こそ、聴き手の関心を向けさせるものとして重要視されている。

他にも、沖縄戦や南京掠奪などの出来事を経由して広島島の被
爆を語り、現代との類似や連続性をもって警告につなげようと
する松田豪。彼が自らも含めた様々な加害者を指し示しつつ語
る、回避できたかもしれない出来事の連なりは、聴く者の「現
在」への信頼を揺さぶる効果を指摘される。山崎寛治、佐伯敏
子、田原幻吉らの語りは、原爆による死者たちのために語るこ
とと、死者に成り代わって語るの間を往復するものとして
取り上げられた。

米山が強調するのは、語り手と聴き手の共感、語り手と死者
の共感ほんのつかの間しか成立せず、それも語り手の自覚す
る伝達不可能性となねに緊張関係にあるということ。それは「共
感の共同体」の危険性——例えば国民国家の言説に回収される
危険——を回避し、各人が異質な位置性を通じて連携するのを
助けるような特徴であるという。

つづく第三部は第五章「エスニックな記憶・コロニアルな記
憶」、第六章「戦後平和と記憶の女性化」からなる。

一九七〇年に平和記念公園の川向こうに建立された韓国人原
爆犠牲者慰霊碑をめぐる言説分析は、差異化される主体として

の在日コリアンを浮かび上がらせるもの。この碑は彼・彼女ら
の体験を想起する場となってきたが、韓国朝鮮人の犠牲者すべ
てを記念する碑であるか否か、日本の植民地支配を連想させう
る文言が削られたのは誰のどんな意向ゆえか、その立地が示す
のは差別なのか特別な意味なのか、といった点で解釈が対立し
てきた。とくに市民権・公民権を求める在日コリアンの多くは、
《「民族として」日本の社会と歴史に参加する》(二四一頁)ため、
碑文に植民地支配の記憶が盛り込まれることを望んだ。

米山の関心は、こういった《不協和音を奏するもろもろの記
憶》(二四六頁)が「回復」されることによって、民族という集
合体が、差異のままに結びつけられる関係性——同化主義に批
判的な連携——として生起する可能性へと向けられている。

第六章で分析されるのは、「日本人女性」を固定化するよう
な想起のあり様である。なかでも「母らしさ」の固定観念によ
って、「広島島の母」は平和・反核言説において英雄化されるこ
とになった。その語りは、アメリカ力による犠牲者・日本を代表
することで母性を国民化する。「母となること」と身体の異常
とを結びつけて不安を抱く女性被爆者たちの経験は、母性を昇
華する支配的言説から締め出され、文学作品のテーマとなった。

一連の支配的な想起において忘却されてきた、日本人女性と
国家の共犯関係を明らかにしようとしたのが、一九七七年刊行
の女性雑誌『銃後史ノート』である。これを紹介しつつ、米山
が突きつけるのは、《女性の過去を女性に属する過去として書
き直すこと》(二八二頁)への懐疑である。ジェンダーの二項対

立関係を攪乱する可能性の一つとして、〈ジェンダーの区別が侵害された経験として被爆が語られたこと〉に言及し、本章が締めくくられている。

本書の概要を追ってみて気付かされるのは、本書評がやや過剰に汲みだそうとしてきた「なぜそれを論じるのか」は、答え尽くせる問いではないということである。記憶の作業によって国民化を促す言説への抵抗、さまざまな「過去」を囲い込み葬り去ろうとする言説への抵抗は、おそらく広島に固有の光景とはいえない。また、広島的光景を経由することが、抵抗を前景化する最も効果的な戦略であるか否かも、新たな論点を構成するはずである。それは、全体を知らねば部分を解釈・評価できず、その逆もまた真という解釈学的循環との闘いでもあるだろう。

その一方で、本書の「はじめに」で感謝が捧げられているような多くの人々と広島を介して縁つき、対話を重ねてきた米山の個人的経緯は、この問いと深く関わるに違いない。研究を通して「それ」との縁を結び上げながら、「なぜそれなのか」を分節化し続けるべき問いとして保持する姿勢こそが、米山を含めた私たちに求められているだろう。

その時、米山のいうように、《象徴の暴力》(五六頁)に氣遣うことはとても困難で重要な課題となる。他者を分析対象として名指し、その経験を説明の言葉に絡め取ろうとするのは、他者を他者として知り応答しあうためのステップとして《あまり性急に放棄されることがあってはならない》(五六頁)。私たちの言葉は、固定化する力と流動化する力の緊張の上に成立さ

せていくものなのだ。それゆえ、私たちの「いま」は、様々に分岐しうるそれぞれの当事者性において、追求され止まぬものとなる。その意味では、《ポストコロニアルおよびポスト核の時代状況は、事実上、いかなる者にもこのグローバルな状態の外にとどまることを許さない》(五五頁)といった常套句となりつつある物言いに、素朴に寄り掛かることはできない。

語りをつうじて記憶の断片をつなぎあわせ、支配的な言説からズレた言説を生み出す個人の行為に、歴史の主体となる能力をみようとする米山の立場は、すでに一定のコンセンサスをえており、さらに共同で練り上げられている最中であるといえよう。そこで看過できないのは、「国民の語り」など支配的言説のあり様である。それは一貫性を備えた堅固なものとは決していえず、周縁を彩る雑多なものを食欲に飲み込みつつづけている……とみるならば、ズレの性質(結局は支配的言説を豊かにする「異質さ」にならないか)は慎重に吟味されねばならない。

読書論と書物の形態論は、その際、大きな手がかりを与えてくれるだろう。語りを「読む」行為が、テクスト内外の条件とパースペクティブによって、聴き手を最終的に何処へ連れ出すのか。抵抗と批判の可能性は、そこにかかっているからである。

米山リサ「広島 記憶のポリテクス」(小沢弘明・小澤祥子・小田島勝
浩訳 二〇〇五年七月 岩波書店/原著『Hiroshima Traces: Time, Space,
and the Dialectics of Memory』一九九九年五月 カリフォルニア大学出版)

(西南学院大学非常勤講師)